

しているという日本語教室です。その中で、日本の子どももボランティアの大人もユックリ成長していこうということをやっています。今、実はこの会場にも、この春、東京の大学に進学したボランティアの高校生が来てくれています。そして、帰省したときに「よるとも会」に来るということが続いています。

◆ もっと地元住民を巻き込みたい

ただ、課題もあります。学習内容というか、やっていることをもっと地域に見せたいと考えています。一般住民にはなかなか広がらない。もっとオープンにして、いろいろな方たちに見に来てくださるようにしたいと思います。私たちのところはいつ来てもいいし、協力できるときにだけやればいいというやり方をしています。ボランティアの方も日本語教室の方に当初から参加して下さっていて、そのときはアマチュアだったのですが、今はプロの日本語教師になった人もいます。その人は学期の合間に半年に2、3回来るようなボランティアです。それでも私たちは構わないし、学習者も半年ぶり、2年ぶりに来ましたという人もいます。それでもいいだろうということで、よく来たねというふうにいつでも歓迎しています。ただ、それを維持するために、さまざまな人たちに理解をしていただくように学習内容の公開をしようと思っています。

あと、最大の問題はお金です。文化庁からもらったり、福岡市国際交流協会からもらったり、いろいろと手を替え品を替えしていますが、これはきついです。ただ、場所も電気代もただですし、冬でも九州（福岡）の学校は、ストーブを入れられないのですが、この教室はストーブが入れられ、学校の方でいつの間にか灯油を入れてくださるという状況が続いていまして、助けていただいています。

藤田 古賀さんもまだまだ話し足りない部分もあると思いますが、後半でまたお話いただきたいと思います。それでは最後に、「川崎市ふれあい館」の学習サポートの取り組みについて、原千代子さんからお願いします。

■ 「川崎市ふれあい館」

原千代子 この東外大の協働実践研究で、外国につながる子どもたちの取り組みを地域から育むということで、「ふれあい館」をそのテーマにのせていただきました。今のところ学校との連携や行政的な位置づけというのはこれからやっていこうという段階です。愛知と福岡の方の実践のお話をうかがいながら、私たちは

まだ全然仕組みがなく、この協働実践研究のテーマにのっかっていいのか、本当にふさわしいのか、と感じたことが正直なところ です。

◆ 時代とともに変化する多国籍住民にどう対応してきたか

「ふれあい館」のある川崎市川崎区は、在日韓国・朝鮮人が多い地域で、1988年に日本人と在日韓国・朝鮮人をはじめとする外国人との交流推進ということでできた施設です。川崎市が施設を設置して、民間の社会福祉法人青丘社が委託を受けて、館長には今、在日韓国人2世が就いています。スタッフにも外国籍やニューカマーのフィリピンやブラジルの人もあります。そういうユニークな施設として、自画自賛じゃないんですけど、全国的に見ても結構注目されている施設かなと思います。



原千代子

ただ、オープンした88年ごろから、いわゆるニューカマーの外国人も急増していきました。「ふれあい館」がある地域は、もともと在日韓国・朝鮮人の多住地域だったのですが、ニューカマーの人が増えていくということになっていきました。その中で、今やっているこの外国につながる中学生の学習サポートというのは、行政的な位置づけのある事業ではありません。「ふれあい館」の内部のものです。そうした中で、私は、コーディネーターみたいな形で学習サポートを担当し、かかわっています。もともと「ふれあい館」ではオープンのときから日本語識字学級が行われています。その学級には定住を始めた外国人のお母さんたち、特に国際結婚のフィリピン人やタイ人などのお母さんたちがたくさん来ています。そのお母さんたちが自分の子どもたちの進路を相談するところから、学習サポートが始まりました。

川崎区というのは川崎駅前の大きな繁華街を中心に、サービス産業も多い地域です。あと、臨海地帯には工場も多く、そこで外国の人たちがたくさん働いています。地域にはいろいろな外国人が多く住んでいて、ある程度住みやすい街でもあると思います。ただ、保見団地のように日系ブラジル人たちが集住しているということではなく、もっと多国籍の街です。ですから、行政施策も多文化共生に向けたものにしていく必要があります。

◆ フィリピンにつながるある女の子の場合

国際結婚をした人たちがもう20年ぐらいたつ中で、どんどん定住化してきて、

いろいろな課題が見えてきています。子どもの課題に即して言うと、子どもたちをどうやって日本の中で教育していくのかとか、高校に入れるかとか、そういうことがよく分からないという悩みがあります。さらに、特にフィリピンの方たちですが、結婚して10年ぐらいて、結構自分の生活も落ち着いてくる。実は本国に残してきた子どもたちがたくさんいるケースもあり、本国から子どもたちを呼び寄せている人が最近多くいます。特にこの学習サポートを始めるようになってこの2～3年、このように本国から呼び寄せる中学学齢期の子どもたちが増えてきているというのが今の一番の課題です。

例えば、ジョセリンさん（仮名）という子は中学2年生の初めごろに日本にきたので日本の中学に入れました。担任の先生も、実は私たちの地元にいる先生なので、人権教育の経験のある方で、その先生と出会えたので、学校でのサポートも受けられました。先生が積極的に日本語指導の先生とか、川崎の場合は日本語指導のボランティアの位置づけというのは半年から1年ぐらしか受けられないのですが、その後もずっとサポートを続けているような形でした。ですから、彼女は順調に学力も伸びていって、周りの子どもたちとの関係もととてもよくて、県立高校に、外国人特別募集という枠ではなくて、一般受験で入れそうな子どもでした。

ところが、06年ですが、受験間近の12月ごろから家でゴタゴタが始まり、この呼び寄せた子どもが家庭の中に居場所がなくなってしまう。母は再婚なので、2番目の父親から十分に受け止めてもらえない。私たちがサポートしている子の中で一番まじめな子でしたが、父親がこの子を自分が見ることはとてもできないということで、ちょうど受験前の1月ごろにフィリピンに帰されてしまいました。担任の先生も人権教育などをやってきて、非常に根性が据わっている先生なので、私と先生は喧嘩を覚悟で家に行って、父親ともいろいろ話をしたのですが、自分はこの子を受け入れるつもりはないということでした。みんなで1月に焼き肉屋さんで涙のお別れ会をして、「将来、チャンスを見つけたら、また頑張るね」と私も言ったりしたのですが、私たちが一番ビックリしたのは、その子がその年の5月になったら、また日本に戻ってきました。私もそのことはすごく衝撃的で、どうして戻ってきたのか全然訳が分かりませんでした。でも最近、改めていろいろ聞いてみると、フィリピンで海外に働きに行く、出稼ぎに行くのは普通の状況です。実はこの親たちが自分たちの結婚生活が安定したという中で、子どもたちを呼び寄せているのは、働いてもらうという目的があるんだということがだんだんと分かってきました。私たちが、呼び寄せた子どもをこれからどう

しますかとお母さんたちに聞くと、「日本でずっと生活するようにします」と言います。私たちは、キチンと学校に入って勉強するとか、あるいは高校に行かないと日本では進路が開けないと思っているわけですが、親たちの意識とはズレがあると思いました。

◆ 学習サポートをどのように進めているか

学習サポートは、人数は常に変動しますが、現在は14人の子どもがいます。国籍はタイ、韓国、ボリビアの子が1人ずつで、あとはフィリピン人の子たちです。私たちがやっている学習サポートでは、非漢字圏の子どもたちを中心にやろうと思っています。私が長年、識字学級をやっている中で、韓国、中国の人たちは結構学習が早く進みます。でも、非漢字圏の人たちの日本語や漢字の学習はとても難しい現状です。今、私たちはボランティア的にやっていますから、全部の子どもたちが来ると到底できないというのがあります。そういう中で、できればニーズが多い非漢字圏を重点にやりたいと考えています。

こうした中で、フィリピンの子どもたちの中で二世代のリーダーが育っていくことが今、とても重要だと思っています。私たちのサポートの中で、ローズマリーさんという方が通訳、相談として一緒に運営を担ってくださっています。民族リーダー的なローズマリーさんがフィリピンのお母さんたちの本音をよく聞いてくれ、ローズマリーさんとの連携の中で相談にのれるということがあります。この協働研究が始まって、地元の中学の日本語の協力者や先生たちとプレフォーラムと一緒に参加したのをきっかけに、子どもをめぐって少しずつ話し合いや連携ができ始めています。

学習サポートの案内は、表が日本語、裏がタガログ語になっています。06年に県立高校に入ったK君は、最近、ボランティアとして中学生のサポートに少しずつかかわってくれています。先日、彼に日本語で英語を教えるということをお願いしました。かなり日本語力が伸びてきたので、中学の英語を日本語で教えることぐらいはできます。一応教材なども準備して、1年生のフィリピンの子を担当してもらいました。

少したってそのサポートぶりをのぞいてみたら、教材を使っていなくて、何をやっているのかなと思ったら、その中1の男の子に、「好きな人がいるか」と聞いていました。その子は日本人の女の子が好きだったようですが、K君は、それだったら、まず「彼氏いるとか、付き合ってたか言わないとだめだ」という指導をしていました（笑）。日本ではそうやって最初から彼氏いるのとか言ったら、

ナンパしているみたいでありよく思われたいといろいろ説明したのですが、K君は全然納得してくれませんでした。後でローズマリーさんに聞きましたら、フィリピンではそういうふうに分らしいのです。好きな人ができた場合に、最初に彼氏とか彼女がいるかというのを確認するというので、こういう世界にも文化の違いがあるのだなと思いました（笑）。例えば、単に英語を教えることではなくても、K君がそういうふうに分らしい方などを教えるようなかわりがあってもいいなと思っています。



笹尾裕一

笹尾裕一 私は高校の教員をやっているのですが、「ふれあい館」の地元に住んでおりまして、原さんに声をかけていただいて、一緒にボランティアをしております。先ほどもお話があったように、地元にはいろいろな外国人の子どもがたくさんいます。私の子どもも小中学校と地元に通っていますが、そこには、韓国やペルー、フィリピンにつながる友達があります。私はそういうつながりでボランティアに入りました。同時に高校の教員をやっているので、今日のようなテーマでのフォーラムなら教員として立ち会わなければいけないのではないかという思いで、話をさせていただきます。

原さんの話に出てきたフィリピンの子たちが、たまたま私の勤めている高校に入ってきました。今、お話にありましたように、私どものサポートとしましては中学校とは連携していたのですが、中学を卒業した後も実はまだ連携は続くということをお話ししたいと思います。といいますのは、高校にせっかく入れたのに、やめてしまう子どもたちもかなりいます。その中には、うちの経済的な事情が厳しくて、アルバイトとかそちらの方が主になってしまって、学校に行くことができなくなってしまったとか、あるいは、日本語のサポートをしているのですが、それが不十分なまま学校に来てしまったということで、勉強についていけなくてやめてしまう子もいます。

一人一人、本当にさまざまな背景があるのですが、そういう子どもたちをサポートするという意味でも、中学生の学習サポートだけで終わらせずに、その後の高校生のサポートにもつなげていくということを今、始めなければいけないのかな、高校の教員としてもやらなければいけないかなと、強く感じています。

◆ 地域、大学、高校との連携が重要

そこで、今出てきたフィリピンの子たちですが、お話いただいたように、K君

という子は中学生を教えることが最近やっと思えるようになったというか、そこまで頑張るようになってきました。それはとてもいいことだと思います。とは言いましても、彼ら自身の日本語力もまだ不十分ですし、学校の勉強も順調にしているかという、なかなかついていけない状況があります。そういうときに特に若い人たちに入っていただいて、大変助かっています。東外大の学生さんにも来ていただきました。また、タガログ語の先生に来ていただいたときに、ふだんは学校でも浮いてしまったりお化粧をしている子ですが、その先生に付いていただいたら、タガログ語で話が分かるということで、1時間半びっしり学習に集中できたということがありました。ですから、我々自身もこの地域の狭い学習サポーターだけではなくて、大学やいろいろな方々の力を得る中で進んでいかなければならないということを本当に実感しております。

高校との連携ということですが、例えば私の勤める高校では、ボランティアを単位化する制度ができました。1時間「ふれあい館」で学習サポートをしたら、「高校」での単位認定のための時間として1時間カウントできるという制度です。K君の学習サポートも、高校との間の連携という形にさらに進んでいけるのではないかと思います。それがまた彼ら自身にとっても、力になっていくと思っております。

それから、うちの学校そのものでも学習サポートをやっているのですが、毎週1回放課後、さらに試験前の土曜日とかやっています。07年度は東外大の「アミーゴス」というグループから多くの学生さんに来ていただき、本当に助かっています。子どもたちは一人一人全部、背景や今の学習状況が違いますから、やはり理想は1対1です。若い人たちが大勢入ってくださることによって、それが実現しました。本当に子どもたちが生き生きと学習に取り組めるし、また、そこで新たなモデルを見せていただいています。こういうお兄さん、お姉さんに、もしかしたらこれからなれるのではないかという、そういうモデルという意味でも、学生さんたちのサポートには本当にありがたく思っています。ということで、地元のこういう「ふれあい館」との連携や大学との連携というのはこれからますます学校にとっても必要なんだなということを教員の立場として感じているということ報告させていただきました。